



巻頭言

## 先人の思いを振りかえる

荻野和己\*



我々は歴史の流れを、その節目、節目から眺めることがよくなされる。また、ある評論家によれば、歴史の大きな節目 — 歴史的転換点 — は数十年毎に現われるともいわれている。このようなことから、現在、我が国は戦後51年、歴史的な転換点にきているのではないだろうか。

戦後の宮々とした努力によってGDPが世界の約16%に達する「経済大国」「技術大国」に成長した我が国ではあるが、バブルとその崩壊、長引く不況による閉塞状態に陥ったような社会、経済、加えて各種のスキャンダル、戦後を支えた社会の機構や組織が金属疲労を起し、我が国の将来に悲観的な予想すら見られるようになった。

一方、技術分野においても、アメリカの復活、アジア諸国の追い上げにより、優れた伝統をもつ我が国の「ものづくり」によって支えられてきた優位さすら失いかねない状態ともいわれている。

生産技術振興協会も設立50年を2年後に控え、かつて敗戦後の殆んど絶望的な荒廃、困難の中であって、新日本の生産技術水準向上のため設立された当時の先人の思いを振り返ることも、歴史的転換点にある現在にとって必要ではないであろうか。

協会設立発起委員の一人であった大阪大学理学部長赤堀四郎先生は協会機関誌「生産と技術」創刊号に「技術への要請」なる一文を

よせておられる。その中に、高度な科学があれば、その応用として自ら高い技術が生れると考えるのは大なる誤謬であり、現に日本においても先端的な純粋科学は欧米に比して、それ程遅れているものではないにもかかわらず、技術において著しく遅れている。この原因は日本人の社会、生活態度にあるとされ、ワットの蒸気機関を例にとり、当時の英国の産業の急速な発展を支えるよりよき動力源を必要とする強烈な欲求によって生れたものと述べられ、「よきものへの強い欲求」これこそ常に技術を発展せしめる原動力であり、日本社会にこの欲求の少いことが、新しい技術の生れ難い原因とされている。まさに技術の基本を着破しておられる至言であり、現在、技術開発をひと言でいえば、用途開発といわれることと軌を一にするといえる。

人件費が世界一高くなった現在、これまでのように生産技術力によって「モノまね」をカバーできる時代が終ったといわれている。技術的観点からいえば、半世紀以前の困難と質の異なる大きな困難が待ちうけているのが現状である。

しかし我が国の進路は「ものづくり」に基づく科学技術立国以外に考えられず、この困難を乗り越える以外に道はない。さいわい、平成7年11月、議員立法により画期的な「科学技術基本法」が制定され、科学技術政策の基本的枠組みが示され、科学技術振興の環境づくりも進みつつある。

先人が敗戦後の困難を乗り越えたように、我々も歴史的転換点にあつて立ちほだかる難関を先人におとらぬ意欲をもって乗り越える努力を続けねばならない。

\*Kazumi OGINO

1929年1月6日生

1953年大阪大学工学部冶金学科卒業

現在、香川職業能力開発短期大学校、校長、

大阪大学名誉教授、工学博士

TEL 0877-24-6290 FAX 0877-24-6291